

Henry James の国際テーマの作品における「アメリカン・コロニー」の役割

齊藤園子

1. はじめに

Henry James の国際テーマの作品群では、登場人物がヨーロッパとアメリカの間を移動し、移動先において違和感や葛藤を経験する様子が描かれる。新旧大陸の道徳や慣習の違いを浮き彫りにする形で物語が展開するため、この作品群は、ヨーロッパとアメリカの「異文化」の遭遇という二項対立的な図式で説明されることが多い。例えば *The American* の場合、アメリカ人主人公 Christopher Newman の挫折を、ヨーロッパと異なるアメリカ的な性質から生じる挫折とみなす議論は多い。しかし Newman はじめ、アメリカ人が旧大陸で経験する抑圧や葛藤は、ヨーロッパとアメリカという単純な二項対立からではなく、重層的な構造から生じている。新参のアメリカ人の悲劇や葛藤に関わる人物、Roderick Hudson の Christina Light や Rowland Mallet、*The Portrait of a Lady* の Madame Merle や Gilbert Osmond、*Daisy Miller* の Winterbourne や Mrs. Walker はいずれも在欧アメリカ人である。また、短編 “The Madonna of the Future” (1879) のアメリカ人画家 Theobald の悲劇は、彼が在欧アメリカ人コミュニティの中心人物に見放され、孤立を深めたことから生じている。本稿では、初期の作品における「アメリカン・コロニー (the American colony)」と呼ばれる在欧アメリカ人コミュニティに着目し、この集団の在り方に James の国際テーマの関心が向けられている可能性を指摘したい。

2. 「ローマではローマのアメリカ人がするようにせよ」

「アメリカン・コロニー」は、在欧アメリカ人が集まる場所である。James の国際テーマの作品の多くが、こうしたアメリカ人コミュニティを構成していると思われる人物を描いている。在欧アメリカ人のネットワークこそ、新参のアメリカ人を迎える関係性である。Daisy Miller をはじめ、新参のアメリカ人の悲劇はヨーロッパ社会からの孤立というより、ヨーロッパの社交界の行動規範を模倣する在欧アメリカ人のコミュニティが求める行動規範から逸脱し、孤立することから生じている。James の作品では、最初期からすでにアメリカン・コロニーの存在の重要性がうかがえる。*Watch and Ward* (1878)の語り手は、結婚後まもなくヨーロッパに渡ってカトリックに改宗した Mrs. Keith について、“She had married and gone abroad; where, in Rome, she had done as the Americans do, and entered the Roman Church.” (39) と説明する。これは “When in Rome, do as the Romans do.” という諺を踏まえた表現である。ローマを訪れたアメリカ人は、「ローマの人々」ではなく、ローマに逗留するアメリカ人のやり方に従うというわけである。

3. Lizzie Tristram のアイデンティティ・ポリティクス

アメリカン・コロニーの構成員のコロニーとの関係性は一様ではない。*The American* の Tristram 夫婦の場合、夫 Tom の方は、コロニーの “The Occidental” というクラブに入り浸っている。彼によれば、そのクラブに行けば「あらゆるアメリカ人、少なくともあらゆる最高のアメリカ人」(33) に会うことができる。Tom がコロニーの内部で完結する人物であるのに対して、妻 Lizzie はコロニーの外のパリ社会と接点を持っている。若いころにパリの修道院で知り合ったというフランス貴族の娘 Claire de Cintré を Newman に紹介するのも Lizzie である。Donald Weber は Lizzie を「疎外されたアメリカン・コロニー」(728) の典型的存在と位置付けている。その際 Weber は、1878年4月18日に *The Nation* に掲載された Frederick Sheldon の記事に言及する。Sheldon はフランスで会うアメリカ人を “low” と “better-bred” の2つのグループに分けている。特に後者は、ヨーロッパの慣習を模倣して同化しようとする「偽物」(355) として痛烈に批判する。後者と考えられる Lizzie は、全編を通じて同国人の Newman に寄り添うかに見えて、実は距離をとり、冷ややかに観察する中間的な存在である。

そもそも語り手は、Newman と Lizzie の関係を「ショー」(39) として描き出す。Newman の方は、Lizzie との交際をヨーロッパを学ぶためのショーと捉えている。他方 Lizzie にとっても Newman の存在は「ショー」である。彼女は「最高に面白い代物」として Newman を眺めるとともに、「偉大な西部の野蛮人 (the great Western Barbarian)」(42) として見せて回るというショーの演出家としての立場も楽しむ。二人の関係は「ショー」の見世物、観客、演出家という役割をめぐりながら展開する。実に小説 *The American* はこの二人のやり取りでエンディングを迎える。最終場面の Lizzie はショーの演出家である。小説のエンディングで Newman は、Bellegarde 家に対する復讐を可能にする紙片を暖炉に投げ入れる。高い道徳性を示したかに見えるが、その直後に Lizzie が、Bellegarde 家は Newman の行動を見抜いていただろうと指摘するために、Newman は「本能的に」暖炉を振り返る。この素朴な行動は Newman の行為を愚行に転じてしまう。初期の小説における Newman

の真の試練は、フランス貴族による不当な扱いというより、この愚行であろう。そして善良な「アメリカ人」の姿を瓦解させるのは同国人の Lizzie である。彼女が終始 Newman を試し、観察し続けた結果である。

4. アメリカン・コロニーの James

同国人を見世物として演出する Lizzie は、役割上、作家 James と重なる。*The American* は、自らも在欧アメリカ人である James による読者に向けた「ショー」だからである。James は Sheldon の記事を踏まえ、約半年後、同誌に“Americans Abroad”という文章を投稿している。ヨーロッパで外部の存在であることを肯定的に捉える見方を示す文章である。しかし、ヨーロッパにおける「よそ者」としての感覚は苦悩であったと思われる。James は *The American* の執筆期、永住を視野にパリに移り住んだが、約一年後、パリを後にする。その理由は、「フランス人の底なしの表面性」や、「永遠のよそ者」いった James の手記に残された言葉に表されている。しかし「表面性」や「よそ者」としての感覚は、アメリカン・コロニーに関わるものでもあったようだ。James は滞在先のヨーロッパにおけるアメリカン・コロニーに対する不満を「アメリカン・コロニーとのもつれ」や「忌まわしいアメリカのパリ」といった言葉で手記に記している。John Carlos Rowe は、Daisy Miller に実在の在欧アメリカ人彫刻家 Louisa Lander が重ねられている可能性を指摘している。Lander は素行が原因で、彫刻家 William Wetmore Story を中心としたローマのコミュニティから孤立したとされる。合わせて Rowe は、こうしたコロニーの描かれ方に、ローマ帝国の過ちを踏まえた警告を読み取っている。欧州において外部であることを受け入れる一方で、アメリカン・コロニーの閉鎖性と表面性には共感できない James が見て取れるのだ。

5. 自分ひとりの国

James が国際的な状況を用いて描く物語は多分に「アメリカン・コロニー」の物語だと言える。同国人にコミュニティへの同化を求め、抑圧する集団の在り方が描かれている。集団が「アメリカ人」として結束性を持つとき、互いを見るまなざしは冷徹なものとなっている。その原因の一端は、在欧アメリカ人の中間的な位置取りによる、変容するアイデンティティにあると思われる。Newman を観察する Lizzie Tristram 自身、ヨーロッパ社会の「外部」として観察される位置にある。しかし Newman を「野蛮な西部人」として差異化し、その西部人のショーの演出家となると、自らを観察者の位置に置くことができる。Lizzie は Newman を利用することで、パリ社会の外部にある自らの位置づけを修正できる。しかしこの中間的な位置取りは、他者との関係性に依存する不安定なものである。Martha Banta は、欧州の同国人を批判する Sheldon の立場を「フランス人から蔑視的に観察されている同国人を観察するアメリカ人」(15) と表現する。同国人に向けた痛烈なまなざしは自身に返ってくるのであり、Lizzie を通して Newman に向けたまなざしは James に返ってくるのである。

欧州のアメリカン・コロニーは、母国の延長にある、縮図とも言えるコミュニティである。この意味でアメリカン・コロニーは国民国家体制に内在する恣意性や抑圧の構造を露呈しているとも言えるかもしれない。パリとパリ近郊を舞台とする中編“Madame de Mauves” (1874) は、国民国家と個人の関係性に疑問を投げかける作品である。フランス貴族と結婚したアメリカ女性 Euphemia は、アメリカ人 Longmore に、フランス人との救いがたい違いに苦しまないか、と問われる。彼女は「自分の部屋や心にあるのは、名もなく、とるに足らない自分の国」だと答える (73)。しかし特定の国や集団への帰属に意味を見出さない Euphemia の位置取りも関係性からは自由ではない。彼女の姿勢は夫の死の要因となってしまう。James が描く「アメリカン・コロニー」の姿は、国民国家の恣意性や国民国家的アイデンティティの構築に関わる James の問題意識と洞察とを記録している。James は晩年、世紀転換期の激動を経て再び、初期に扱った国際テーマの都市に立ち返ることになる。

引用文献

Banta, Martha. “Introduction.” *New Essays on The American*, edited by Martha Banta, Cambridge UP, 1987, pp. 1-42.

James, Henry. *The American*, edited by James W. Tuttleton, Norton, 1978.

---. “Madame de Mauves.” *The Complete Tales of Henry James*, vol. 3, Digireads.com, 2010, pp. 61-107.

---. *Watch and Ward*. Boston, Houghton, Osgood, 1878.

Rowe, John Carlos. “Henry James and Globalization.” *The Henry James Review*, vol. 24, no. 3, Fall 2003, pp. 205-14.

Sheldon, Frederick. “The American Colony in France.” *The American*, edited by James W. Tuttleton, Norton, 1978, pp. 351-56.

Weber, Donald. “Outsiders and Greenhorns: Christopher Newman in the Old World, David Levinsky in the New.” *American Literature*, vol. 67, no. 4, Dec. 1995, pp. 725-45.

(謝辞 本研究は日本学術振興会科学研究費助成事業基盤研究 (C) (16K02502) による研究の一部です。)